
柳川拓斗心霊日記

yuri@百合百合百合

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

柳川拓斗心霊日記

【Nコード】

N3181Y

【作者名】

yuri@百合百合百合

【あらすじ】

出来たばかりで本編の内容もまだはつきりしているわけではないので、ネタバレ防止のためにまだあらすじはかけません

緑桜山の怪 1（前書き）

この物語はフィクションです。

本編に登場する地名、団体名、施設名、人名などは現実のものとは一切関係ありません。（特に地名と学校名）

また、作者の独学による独自解釈なものも多々有るため、独自解釈にはスルーをお願いします。
ただ、これは事実としてある、といったものは指摘して頂けるとありがたいです。

緑桜山の怪

1

夜。

そこは果てしなく続く林。

どんなに走つても走つても決して抜ける事はできず、男は徐々に恐怖していく。

そうして必死になって、駆けるうちに最悪な物に遭遇した。

「うあぁっ　　ああ、ああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

喉が潰れんばかりに声を張り上げ、叫ぶ。

情けなくも腰を抜かし、その目に映ったモノを凝視する。

彼にして見ればそれは目を逸らしたいモノ。

しかし、恐怖とそれによる混乱が体について事を聞かせない。

動け、動け動け動け

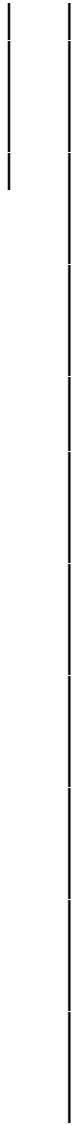
そう念じてようやく、体を動かせるようにはなっても、手足をバタつかせる様にして、ようやく這いずれる程度。

だが、そんな足掻きを見せる彼に一つの黒い影が後ろから迫る。それに気づくや否や、更に動きを早めようとする。

[illegible]

[illegible]

「誰か……たす



—— 6月27日 ——

昼になり、授業の終わった俺はそそくさと教室を出る。

白を基調に、シンプルな色で塗られた廊下には、俺と同じ方向に向かう奴等であとんだ。

恐らくは同じ目的だろう。

みまたし
御又市に存在する私立大学、御又大学。

神奈川県の港より—— という訳ではない。 むしろ港よりもずっと離れている。

だが、街は東京の中心部並にしっかりとした都会である。

そんな場所に建つこの大学は、私立でありながら公立となんら変わりにない、強いて言えば多少高い程度。

なんでも、相当古くから立てられ、十二分に設備が整ったので、教師の給料などに使ったり、修理の為に溜める程度で良いとの事。

やながわ たくと
俺、柳川拓斗の都合上、かなりいい学校だった。

そしてその整った設備というのは勿論、今俺が向かおうとしている学食も例外ではない。

正にレストランともいえるもので、本格的なランチも作ってくれるだけでなく、軽食・カフェも楽しめる。

まあ、高校のかなり規模のでかい食堂がおやつも作ってくれと思
つてくれて構わない。

「あ、拓斗おゝ？ 何か変な人からこんな渡されたよゝ？」

カフェテリアに入ると早速声をかけられた。

だが、その声の主は聞いたことない者ではなく、俺も特に驚きも
せずに言葉を返す。

「ん？ 何だそりゃ」

「さあ、本人以外は触っちゃダメ行つてたから。 見てもな
いよ」

声をかけたそいつ、幼馴染兼彼女の富江梨奈とみえりなまでかけていく。

真っ直ぐに伸びた、しかし少しフワフワした感じの茶色い長髪を左
の襟足らへんにサイドポニーにして結んでいる。

服はノースリーブと言ったか、袖のないシャツで、その上に半袖の
上着を着、ズボンはデニムの短パンを履いている。

6月末とは言え、今年は早い時期からかなりの暑さになっていたた
め、こうして露出の高い服装は梨奈以外にも見れる。

俺もズボンが長ズボンな事以外は薄着のシャツだしな

そうして梨奈の服装をまじまじと見てみると、持っている紙袋を渡
された。

——怪しすぎるだろ

そう思いながらも渡された以上は持つておく。

とりあえず今は飯が食べたい。

中身を見るのは、それからでもいいだろう。

まずは席な訳だが、今日は珍しく若干混んではいる。
中々2人隣同士で座れる席を見つけたのが難しかったが、奥のほうに結構大きめな席を見つけたので、そこへ行く。

先程も言ったが、ここはレストラン——ていうかまん
まそこらのファミレスと変わらない方針で、業務の人を呼び出して
注文さえすればその通りの料理を持ってきてくれる。
違うところはボタン押して呼ぶのではなく、口で呼ぶ事ぐらいか。

カフェテリア方式にすれば良いのに

「お、お前こんな所に居たのか。よかったよかった、席も空いて
るみたいだな」

席に座ってテーブルに置いてある表からメニューを決めている内に、
後ろから声をかけられる。

その声もまた、聞いたことのあるもので、振り返るとそこには男が
一人立っていた。

同じ授業を受けていることが多い柿本敦史。
かきもと あつし

今日の服装はどうやら緑基調のチェックの上着に白いTシャツ、ジ
ーパンといった格好だった。

高身長一（本人曰く179cmとの事）で、吊り上がった細目が印
象的だが、大人しい性格とは裏腹な見た目の所為で周りから恐がら
れているのを気にしているらしい。

敦史は向かい側の席に座り、梨奈をちらちら見ながら一息吐く。

梨奈もまた、敦史をちらちらと見て俺に質問してきた。

「そっちの人は誰？ 拓斗の知り合い？」

ああ、そっか。

敦史と俺は同じ授業を受けてる事が多いし、たまに梨奈とも一緒になるけど、3人揃っててのはなかったからな。

「そうだったな、2人は面識無いのか」

じゃあ紹介するな、とまずは梨奈の方を向き、手で敦史を指し示す。

「こいつは柿本敦史。一緒に受けている授業が多くてな、次第に仲良くなった」

次に敦史の方を向き、さっきとは逆に梨奈を指す。

「で、こっちは富江梨奈。俺の まあ、彼女。 まあ仲良くしてくれ」

人に自分の彼女を紹介するのは正直はずい。 が、事実なので一応言って置く。

「へえ、お前いつの間に彼女なんか作ったんだ？ 俺の知らないところで合コンとかやってたのか？」

敦史が少し不満そうな顔を浮かべて俺を見る。

それに微笑を浮かべながら首を横に振り、答える。

「違う違う。 こいつとは幼稚園からの幼馴染。 親同士が友達だったらしいからな」

「え？ 小学中学高校まで？」

「まあ、そうだな。流石にクラスまでは一緒だったし、違かったりだけだ」

何だ今の間は、と言いたくなる位敦史が相当固まっていた。

確かに、幼稚園、小学校、中学校までならともかく、高校、そして大学まで一緒ともなれば珍しいを通り越して異常かもな。

だけでも、普通に今まで一緒だった俺——俺たちにとっては一緒に居る事が普通だったから——

まあ、そういったお陰で中学の頃には『ストーカーのし合いっこ』、高校の頃にしっかりと付き合うことになったのもあり、『夫婦』なんて呼ばれる羽目にはなかったが。

陽気な梨奈はそれで満足してるし、俺も満更ではないので不満をいう事もない。

しかし、そんな思いとは逆に敦史はまだ引きつり気味の顔でこちらを見続ける。

めんどくさいな

「あ、そう言えば」

この話題から早く切り抜けるためにその言葉で話を転換させる。

さつき梨奈に渡され、足元の紙袋を手に取り、顔の高さまで上げる。

「何だそれ？」

さっそく敦史が反応し、紙袋に何故か異常なほどにたくさん張り付いているセロテープを剥がしながら答える。

取りにくいな

「なんか梨奈が変な人に『俺に渡せ』って渡したもんらしいけど。

中身は俺もわかんね。あ——」

テープと一緒に袋まで破れた。

これ破らないで剥がす方法あんのか？

やっと全部剥がし終わって袋の中身を覗く。

その中には、熊のぬいぐるみが入っていた。

疑問に思い、手を入れ、取り出してからよく見る。

「あ、かわいいー」と、梨奈が触ろうとするが、その手を避け、改めて凝視した。

水色を中心とする明るい色で、質感はまあまあ。

俺へのプレゼント？ にしては何故ぬいぐるみ？ つーかプレゼントする意味がない。

隣に居る梨奈に声をかける。 触らしてくれなかったからか、若干睨みつけてるようにも見える。

「これを渡した奴ってのはどういう奴だった？」

「 普通の女の人の人だったよ。 ちょっと暗い印象だったけど。それくらいしか」

いつまで怒ってたんだよ

声のトーンが低いぞ

もう一度ぬいぐるみを見る。

最初見たときから、てか紙袋に入っていた時から違和感があったが、今の言葉を聞き、一層怪しさが増した。

神経を目に集中させる様に、しっかりと見る。

すると、そのぬいぐるみから妙な感覚が感じられた。

脳に、神経に直接叩きつける様な感覚が。

言葉に表すには中々難しいが、わかり易く自分に叩き付けられたこの感覚を視覚で表すなら――

“このぬいぐるみから紐の様な物が垂れ出ている”

そう言える。

しかもその“紐の様な物”はただ出ているだけじゃない。長く長く伸びていて、恐らく辿っていけば確実に学食を抜ける。

何なのだろうか――

と、

そこで梨奈のさっきの言葉を思い出す。

『暗い印象の女の人』

それしか特徴がないとは言っていたが、それでも十分に思い出せる

だけの心当たりがある。

俺は紙袋にぬいぐるみを戻し、なるべく自分の位置から離れた。

いきなりそれを使ったもんだから驚いたんだろう。 梨奈が「どうしたの？」と聞く。

うんざりした気分になりながら、改めてメニューの表に目を通しつつ、答える。

「お前にそのぬいぐるみ渡した奴は多分オカルト研究会だろ、サークルの」

「え？ そうなの？ でもなんで分かったの？」

そう言いながら、そつと袋の中身を覗こうとする梨奈をすばやく手で制する。

そしたらまた睨んできた。

またか

「このぬいぐるみ、一種の縁結びがかけられてんだよ。合法的に拉致するつもりだったんだろうな」

縁結びとは呪いまじなの一種で、その名の通り人と人の繋がりを結び続けさせるもの。

基本的に恋愛沙汰で使われ、離れていても相手と通じ合えたり、また会うことが出来るというまあ何ともロマンチック？な呪いだが。しかし本格的なものになるとそんな生易しい物ではなく、自分の生霊や怨念を乗り移させ、相手の意識を乗っ取る事もできる。

良く怪談なんかで『いつもの帰り道を歩いていたらいつの間にか知らない所に来てしまった』というのが、帰り道でなくてもいい、とにかく何処かへと歩いていたら目的と違った場所に来てしまったな

んて事があるだろう。

その場合、霊的存在に脳をジャックされ、自分のテリトリーまで連れてこられたわけだ。

だから、無意識のうちに違う場所へ来るのである。

縁結びはその人間バージョンであり、このぬいぐるみだと、このぬいぐるみを持った人間が持ち主まで引き寄せられるというもの。

そう言った事を説明した上で梨奈に注意する。

「だから、なるべく気をつけてくれよ」

とは言っても、そんなのは無茶苦茶な事この上ないわけではある。つか、ただの八つ当たり。

「なあ、もしかして拓斗はオカルト系とかそういったものを知ってるのか？」

そんな俺と梨奈2人のやり取りの最中、敦史が唐突に口を開く。まあ、確かにあそこまで説明すれば大抵はそう思うだろうな。

「一応は。人並み以上だとは思ってるけど」

「そんなレベルじゃねえだろ。結構それなりに知識あったけど。あんまこっぴうのは信じないんだけど、靈感とかあんのか」

…うーん

多くはない知識を長ったらしく喋ってたから知識量が多いと勘違いしてるだろうか。

とはいえ、

「確かに所謂靈感はあるんじゃない？」

「へえ」

『ある』と答えた瞬間、興味津々な顔でこちらを更に見る。おい、信じないって言った奴。

そこで丁度近くにウェイターを見つけたので、呼んでメニューの注文をする。

普通のレストランと違うところも一つ、カウンターを設けているわけではないのでウェイターに前払いで払う事になっている。無駄な人件を削減させたわけだが、さっきも言った様、正直力フエテリア方式にすればいいと思うけども。

3人メニューを頼み、落ち着いたところで敦史がさっきの話題を続けてきた。

「靈感があるって事は幽霊が見えるんだよな」

信じないって言った割には結構食いついてくる。

正に目が輝いていると言ってもいい。

「ああ、一応は。見えるメリットは呪われる危険を回避しやすい程度で、あと大した事はないな」

実際回避できる確立は少ない上に、相手の場合、見える奴にしつこく付き纏うからデメリットが多いわけなんだが。

霊に見えるとバレ、取り付かれそうになった場合の対処法は、全力疾走をいつもしている。

帰り道など、クタクタになったときに来られるともの凄くめんどくさい。

おかげでよく疲れに疲れが溜まっていた。

物思いに耽るのを止め、もう一度敦史を見る。

すると、先程までの興味津津な態度とは一変し、何やら深く考え込んでいる様子だった。

おかしいな。如何にも興味ありげだったけど

「どうした？」

しかし、聞いても「いや 」とか「その 」としか言わず何

かごもごも言っている。

このまま無理に言わせるのもどうかと思ったので、取り合えず注文した料理が運ばれるのを待つ。

すると2、3分経ったか、それ位に敦史が口を開く。 案外早いな。

「実はな、お前とは違う授業で、一緒になった奴にな、ある事に誘われて、他の奴もできれば誘ってくれと言われたんだよ」

ある事？

前の話からの流れからして、強烈にやな予感しかしないが、念のため聞いてみる。

「ある事って？」

此処まで話しておきながら、敦史は妙に気まずそうにしたが、数秒経ってゆっくりその言葉を口にする。

「心霊スポットだよ」

緑桜山の怪 1（後書き）

はい、以上第一話でした。

知っている方は知っていますが、主人公の名前は私の前のユーザー名です。

ああそうだよメアリー・スーだよっ！！！！

自分に見立ててちゃっかりリア充を演出しましたよ！！！！

まあさておき今回の小説。

以前にも1つ作っていましたが消しました。

見ていた方は知っていると思いますが、私は基本3人称系の視点の小説を書きます。

一人称視点はこれが初めてです。

理由はタイトルが『日記』であるため、主人公視点からしたらいいかも……（まあ、たまに三人称視点混じるけど）と、堅苦しい三人

称とは違つ、ぶつ飛んだ一人称を書きたかつた（こつちが本音）
ていうのがあります。

正直いつまで続くか分かりませんが、きりよく終わらせようとは思
うので宜しく願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3181y/>

柳川拓斗心霊日記

2011年11月17日03時23分発行